

第六章 駐露公使時代

小村は倫敦滯留数日の後大陸に渡り、明治三十三年・一九〇〇年五月の初め露都に着任した。その五月末には清国に義和団の乱が起り、列国公使は重圍に陥り、次で北京の総攻撃となり、陥落となり、講和となつた始末は今説かない。小村の露国の態度に關し遂次露都より報告したところの要領も、これまた後章に譲ることとする。

小村は着任後程なく、当時館員数名のついて学べる一露人を聘し少時を割いて露語の修習に余念なかつた。歴代の我が駐露公使中、露語を解する人としては西公使があつたが、着任後師を聘し露語を学んだ公使としては、彼をもつて嚆矢とする。人が「えらい御奮發ですナ」といへば、小村は「イヤ今度来任に際し、露境に入りて後は言語全く相通ぜず、停車場でも太文字で地名やら注意事項やら書いてあつても、何のことやらさつぱり解らず、そこでは非一通りは露語を学んで置かなければいかぬと思うたのです」と答えた。又理髮師に命じて毎朝定刻に来館せしめ、髭髯の手入を一日も怠らなかつた。理髮師を毎日招くなど、これまで歴代公使中小村以外に見なかつた由である。館の事務室に至つては彼は着任後僅に一回降りて来て館員の執務振を覗いて視た外、再び見に来たことなく用務は総べて館員を己の室に招いて命ずるのが常であつた。

小村は着任後、露帝に拜謁して型の如く国書を捧呈した。当時恰も歐洲御巡遊中の閑院宮殿下には、遠からず露都に御入来、西比利鉄道にて帰朝せらるべき予定であつたので、小村は国書捧呈の折をもつて、右の次第を言上し、殿下

の旅行中の安全につき露国政府に於て配慮ありたい旨の希望を陳奏した。露帝はこれに對し、西比利鉄道開通の初めに方り日本皇族のこれを利用せられることは同鉄道のために一瑞兆であると言われ、右希望を諒承する旨勅答があつた。小村は露帝及び皇后の御前を辭し、次で皇太后に拜謁したが、皇太后には予て露帝の皇太子時代に於ける大津事件を深く記憶に印していられたようで、小村の前任林公使（董）の往年着任後初回の拜謁の際にも、皇太后より林にその官歴を問われ、林の自分は曾て兵庫県知事を勤め、その節皇帝陛下の御来朝を神戸にて奉迎仕つたと言上するや、皇太后には直ちに大津事件を想起し、当年の驚愕心痛を物語られたこともあつた。今小村の拜謁に際しても、皇太后は話頭をこれに向け、当年のことを述懐せられたので、小村は「日本にも歐洲諸国に於けると同様に、時には狂人が出まして、意外の椿事を惹起することのあるのは困つたものです」と軽く応えた。

閑院宮殿下には程なく同年七月を以て露都に入られ、尋でコロンスタット軍港を訪問せられたが、北清の情勢險惡となつたるに鑑みられ、西比利經由を御中止の上、海路御帰朝になつた。

この時に方り、北清よりは姿を報ずること漸く急であつた。露国外務省では、外相ムラヴィエフの急死後、次官のラムスドルフが外相となつた。当時露帝は在本邦公使イスヴォルスキーを擢用する意であつたが、ムラヴィエフと感情の相容れなかつたイスヴォルスキーを外相に迎えることは、露国外務省の空氣がこれを許さない關係もあつて、結局ラムスドルフの昇任となつたのである。

露国外務省の幹部は、歐洲及び近東方面の状況には精通するも、極東の事情には概ね疎く、随つて彼等は北清より種々の情報に接するも、多くは地名をすら解せず、況して事變の真相を判断するが如きには、事実頗る困難の状であ

つた。また露都の外交団中にあつても、清国に關する知識に於て何人も小村に及ぶものなく、諸般の情報を判断する力に於て小村は同僚の間に嶄然群を抜くのがあつた。であるから、露国外務省当局者も、露都外交団の人々も事務局について小村に事を尋ね、その意見を叩くものも多く、これにより彼は露都の外交界にあつて陰然重きを成した。小村がこの間にあつて露国の態度に甚大の注意を払い、その一挙一動を厳密に監視し、逐次これを東京に報告して我が政府の措置に資したることの如何に多大であつたか測り知れない。

我が国にあつては、露国がこの事変を機として、滿洲に對する多年の匪望に向つて歩一步を進めるのを見、国粹派の志士は憤慨措かず、特に近衛その他支那保全を唱える同志は、相謀つて国民同盟会を組織し、對露問題を提げて大いに天下に呼号した。青木外相は同会が滿洲を云為するをもつて外交に害ありと為し、その行動を抑止しようとし、遂に親しく近衛に警告を加えたこともあつた。同志中には時局の真相を共に語り、その解決の局に当らしむべきものは、朝野を通じ小村を措いて他にあらずとなし、これを山県首相に説いたものもあつた。時恰も對清善後方案の講立について北京に列国使臣會議の開催を見ようとする際であつた。山県は小村の手腕を北京に煩わすの要を認めたが、その發令を見るに至らずして内閣の更迭となり、やがて伊藤内閣となつた。新内閣もまた所見を前首相と同うしたので、加藤新外相は同月二十三日をもつて小村に清国駐劄の内意を電照した。小村は露国に來つてより未だ幾許くもならず、かつ露国の事情を調査せんとの念深かつたけれども、ひるがえつて北京の狀態を考うれば、頗る関心事であるから、奮つてこれを諾した。越えて数日、小村は帰朝の電命に接した。

當時露帝はクリミヤ半島ヤルタの離宮に行在中であつたので、彼は帝に告別の拜謁をし、また扈從の外相ラムスドル

フとも会見を遂げ、兼ねて途すがら南欧の事態を視察しようと思ひ、同十月末落合書記官を随えてクリミヤに向つた。ヤルタに於て拜謁に前後してラムスドルフとはもちろん、蔵相ウキツテとも相会して時局に關する意見を交換し、また同宿の駐露清国公使楊儒とも談論した。小村は後年ポーツマスにてウキツテと樽俎折衝の折、ある時ウキツテに向ひ、往年ヤルタで交換した對清意見は今なお記憶を逸せずと語つたのに、彼が自分は大半忘れたりと答えたのは呆氣ない。小村はヤルタを辞してセヴァストポリに向う途中、陸相クロパトキンをその別墅に訪ひ、告別の挨拶旁々少時の會談を遂げた。ヤルタ・セヴァストポリ間の沿道、特にバイダル附近は、前には黒海の波光清く、背には千仞の断崖天を摩し、幾多の岩礁浜涯に基布し、波濤の反激するところ白泡哮ゆという状で、岸に沿う一條の経路は羊腸の如く、紆余曲折している、その上を馬車は疾駆するのである。小村は一再馬車より降り、或は歩み或は佇立して、眼前の勝景を觀賞したので、薄暮辛うじてセヴァストポリ発の汽車に間に合うた。セヴァストポリからは一駛千里、南欧の風物は珍らしく小村の眼底に映じた。

かくて小村は一旦露都に歸り、十一月八日同地を發して倫敦に向つた。露都離去の際、小村の手荷物五十余個、館員は割増運賃多くも二百ルーブルを出でないだろうと語つた。小村いう「それ許りでは足るまい、三百ルーブルも持つて行つて見給え」と、館員馳せ歸り、復命していう、「やはり足りませんでした、四百ルーブル近く取られました」と。小村すかさず「それ見給え、君等は沢山荷物を持つた経験がないから駄目だ」と哄笑した。當時之を七年前、初めて北京に赴任の際、僅に行行李二個に過ぎなかつたのに比すれば大きな変り方である。

小村は倫敦より米國に渡り、一路晚香波に向つた。その紐育に滞留中、小村の客に語つたところは簡單乍ら清英露

の三国の情勢を穿つてゐる。

『今度は突然北清事変の跡始末で、一旦帰朝した上直ぐ北京に行くことになりませう。実は露国へ行つて間もなかつたし、研究したいこともあつたが、併し支那の方の問題は、この機を失すればこれ迄の苦心が水泡に帰してしまふ心配がある。併し何を研究したつて日本の肝心の目的は支那です。その支那の問題は今度の北京會議が大切です。第一私の是迄の仕事の行掛りは皆支那にあるのだから、今度はそれを纏めるのに屈竟な機会に相違ありません。』

英国は南阿戦役で、政府も人民も植民地防禦問題に余程頭を悩ましたようです。ところが今度の北京事変で、一層その度を増して来た。英国は實際今度東洋で僅々一万の兵を纏めることも独力では出来なかつた。金ばかりあつてもイザといふときは、あの通り何の役にも立ちません。どうしても東洋問題は、日本を差し置いては何事も出来ぬと、英国は明らかに今度覺つて来たでせう。これからです。いよいよ日本が世界の舞台に出て仕事の出来るのは、日本の兵隊は初めて文明国の兵隊と肩を並べて戦い、勇氣のあること、規律の正しいこと、決して欧米の兵隊に劣らぬことを証明した。諸外国は初めて日本の恐るべきことを悟つたでせう。英国はますます日本の陸軍に依頼せねばならぬと思つてゐるに相違ない。日本兵は昔から慥々たる天性です。この点が日本兵の長所であるが、同時にまた短所でもある。何んでもかでもドツと一時に攻めつゞけてしまわねば承知の出来ぬ質です。海軍ならば水雷攻撃、陸軍ならば突撃がよく適當している。何時でも日本が戦争するときには、一度に敵を打ち破つて置いて、後に外交の力でやるようにしなければ駄目です。日本兵は長く忍耐させようとしたら、どうも後が心配のようです。この点は露兵が一等であらう。露兵は長く堪えることが得意の方です。日本兵のやうに機敏な働きは出来まいが、彼等にはまた彼等の長所があります。

今度露国を出発する前に、皇帝にお暇乞にクリミヤへ行き、その時南露地方を多少視察した。露国の田舎の農民の状態もほぼ想像がついた。朝鮮や支那あたりと似たようなものです。露国がオデッサから東洋へ送る軍隊の模様も見したが、その輸送はなかなか困難なようです。僅々数千の兵を送るのでさえあれ位困難のようであるから、露国が東洋へ何万という軍隊を輸送するには非常な

困難に相違あるまい。それに馬匹だの糧食だの運搬も加わつて来る。それで露国は今西比利鉄道の工事に追われているが、とにかく東洋に地盤を据える覚悟らしい』云々。

よく当時の極東國際關係のなかに於ける日本の位置と役割を尽していると云えよう。殊にその清國觀及び極東に於ける英國勢力の觀察は日英同盟への發展を含むものとして注目される。

小村は同三十三年十二月十九日をもつて帰朝し、即日清國駐劄を仰せ付けられた。この時に方り北京は漸く外交の迷宮に入り、小村の啓導を俟つや頗る急である。そこで滯京僅に一週間で北京に出発することゝなつた。出発に先だち小村は近衛、佐佐木、杉浦等国粹派の諸士の需に応じ、特に少時を割いて華族會館に相會し、時局の真相を説き、抱負の一端を語つた。近衛は華胄界の俊髦で、国家棟梁の材として夙に同志の間に推されたることは人の知る通りである。

その時小村は「外交の機密はこれを漏すこと能わざるはもちろんであるが、ただ余は諸君の人格を信じ、時局の一斑を語るから、諸君もその心をもつて聴かれたし」と前置きし、世界の大勢から東亞の現状を論じ、列國の對極東政策に及び對清對露方針の一端を吐露し、終りに「外交当局者の為すところは實は一時的の對症に過ぎぬ、根本の國策に至つてはこれを教育家の尽瘁に俟たざるを得ない、我が國民の狀態を觀るに、對外の思想甚だ低く、折角の對外經營も國民と歩調を一にし得ざるの感がある、世の先覺者願くはこれを考えられよ」と語り、諸士の自任自重を求めた。その後近衛等同志を率いて國民の對外思想の涵養に努め、又東亞同文會を興し、同文書院を設けて力を人材の養成に尽し、特に杉浦は近衛、佐佐木等同志の依囑を容れて一時清國に赴き、奮つて自ら教化の任に當つたのは、一は小村

の勸言に共鳴したからであろう。

小村は十二月二十七日、御用船にて宇品を發し、山海關を経て翌三十四年一月六日北京に入り、西公使と交替した。爾来小村は北清事變の善後外交に渾身の智能を傾けて清廷及び列国代表者と折衝し、事毎に機先を制した次第は、次章の談判経過で明らかであろう。二三の外国使臣が小村の軀幹短小で举措敏捷、精力絶倫で間断なく駆け廻つてゐるを見、鼠公使の綽名をつけたのはその際のことである。

第七章 駐清公使時代

第一節 義和団の騒乱

明治三十三年・一九〇〇年初夏北清に排外的拳匪の乱が起り、列国の共同出兵となり、翌三十四年九月北京で最終議定書の調印を見るに至つた前後十数ヵ月の間、清国と日、英、仏、露、独、白、西、奥、和、米、伊の十一カ国とを対象としたいわゆる義和団事件は、小村をして列国折衝の外交舞台に立ちて特に傑出した働を演ぜしめた一大機会であつた。露国の満洲経営は義和団事件を離れてこれを溯尋することができぬと均しく、小村の外交上の閱歴及び手腕は、この事件を知らずして評価せんとするも不可能である。されど義和団の性質、団匪蜂起の原因、その他擾乱それ自身の経過は本編の範囲以外に属するから、ここには単に北清事件に対する列国の態度及び小村の外交を討究するに必要な程度に於て事變の始末に触れるに止める。

明治三十三年の初春、団匪の直隸地方に出没し、在留外国人を脅威するとの情報陸續北京に達したので、列国公使は協議し、清国政府に対し義和団匪及び大刀会等排外党に対する取締方を要求したが、清国政府は深く顧みなかつたので、その間に匪勢は益々加わり、同年五月、直隸省涿水県に於て基督教徒を殺害し、次で彼等は正定保定間の鉄道を破壊し、電線を切断し、停車場を焼き、外人及び外教信徒を襲撃し、進んで京津の間に迫つた。清国政府はここに始め